

スピーチにおける「重要性」伝達の方略

比較言語的研究

1. 序論

スピーチは聞き手にある意図を伝達するために行われる。このメッセージを伝えられるように、話し手は、言語そのもの以外にいくつかの音声方略(タイミング、音量など)を用いて、ある意図を伝達しようとする。これらのプロソディ手がかりは、特定の単語、句、文の「重要性」を伝えるためにしばしば使われる。話し手と聞き手の間の意図の伝達にかかわるプロソディの重要性は指摘されてきたが、定量的な研究はほとんどなされていない。特に文章の中の一部を強調するための手がかりを音声の物理測定に基づいて分析した研究はないのが現状である。そこで、本研究はスピーチにおける「重要性」伝達の方略を検討した。

プロソディパターンは言語や文化によって強く影響されると考えられたため、比較言語学的見地から、異なる言語グループに属する3つの言語(ルーマニア語、日本語、英語)における意図伝達のパターンを分析し、この課題を研究した。本研究は「間(ま)」、声の大きさ、発話速度の分析に焦点を当てている。

2. 実験1(日本語)、実験2(ルーマニア語)、実験3(英語) スピーチにおける「重要性」伝達の方略

【目的と方法】

これらの実験は、スピーチの特定部分を強調するために、それぞれの話し手によって用いられた3つの言語の音声方略を検討した。被験者は彼らの母国語(日本語、ルーマニア語、英語)で2種類のスピーチを朗読した。最初は、特定の指示なしで(統制条件)、次に、その文章の中の(実験者によって選ばれた)1つが一番重要であることを聞き手に伝えるように求められた(意図伝達条件)。それらのスピーチは定量的に分析された。

【結果と考察】

スピーチのある項目が他の項目より重要であることを伝えようとする時、話し手は重要な文の前後により長い「間」を取り、より遅い速度で話した。さらに、重要な文は、他の重要でない文に比べて、声が大きく、強調される項目内の発話音量の変動が大きかった。3つの言語の方略の使い方の特徴として次の3点が挙げられる。

- (1) 重要項目の前後で最も長い「間」を取るのは日本語であり(1340msec)、次いで英語(870msec)、ルーマニア語(520msec)であった。
- (2) 日本語は重要項目の後の「間」を強調し、ルーマニア語は前の「間」を強調するという違いが見られた。
- (3) 英語は重要性伝達の方略として「間」よりも、発話速度を用いる傾向が見られた。

3. 実験4 - 聴取実験(スピーチにおける意図の認知)

【目的と方法】

本実験はスピーチの音響的要因を通して、話し手の意図が聞き手によって認知される度合いを判定するのを目的とした。このスピーチは母国語の日本語と未知の言語のルーマニア語の両方で行われた。未知の言語実験の目的は、言語的情報(意味内容)による手がかりを排した場合にも、非言語情報(プロソディ手がかり)のみによって意図の伝達が可能であるか否かを検討することであった。

【結果と考察】

母国語では、話し手の意図は90%以上聞き手に正しく伝達された。

未知の言語においてさえ、話し手の意図がかなりよく(50%以上)認知され、話し手によって用いられる音響的要因(プロソディ)からのみでも意図の伝達が可能であることがわかった。

4. 総合討議

本研究では「間」、発話速度、声の強さのようなプロソディ要因は異なる言語グループに属する3つの言語の全てのスピーチにおいて、情報伝達のために大いに用いられていることが明らかになった。これらの言語を母国語とする話し手が「重要性」を表現するのに用いる方略は共通しており、分析された3つの音響的要因を統合的に利用することによって、より効果的な意図伝達をはかることがわかった。

しかしながら、3つの音響要因が意図伝達に貢献する程度は3つの言語では異なっている。日本語では、重要項目後の「間」が意図伝達において、極めて重要な役割を果たすと考えられる。一方、ルーマニア語では、前の「間」が強調のためによりよく使われている。英語では発話速度の利用に特徴がある。

さらに、言語的情報が得られない時には(未知の言語の場合のように)、音響手がかり(プロソディ)が意図伝達に重要な役割を果たしていることも明らかになった。

今後、項目内の音響特性を詳細に分析して更に検討を加えるとともに、音声手がかり(特に「間」の取り方)を人工的に変えることによって、話し手の意図したメッセージの伝達がどのように変化するかを調べるために実験を行う必要がある。